町民文芸

只見短歌会

平成二十二年二月詠草　　大塚栄一　指導

一年の計と決めたる新聞の社説を今朝も声出して読む　古川　英子

姉妹なきわれに情けか雛一体常に飾られし幼日忘れじ　吉津　政枝

苔覆ふ樹皮に染みつつ降る雨は雪に微かな色を残しぬ　目黒　富子

女孫よりもらひし薬飲み終へて味覚もどれば調理手伝ふ　皆川　恒子

忽ちに迎へし夫の三回忌雪の中ゆき寺にて済ます　五十嵐英子

隣家とわが家間の雪の嵩日ごと減りきて部屋の灯とどく　渡部ゆき子

従姉らと久々に会ひ話しるて子を待つ三時間束の間に過ぐ　五十嵐夏美

高齢化社会となれど金婚を迎へる人ら割と少なし　馬場　八智

見上げ居る風なき空に一本の飛行機雲は太くなりゆく　齊藤ちひろ

吹雪く中葬儀を終へし亡き母の二十三回忌は夢のごと過ぎし　渡部ヨリ子

野良猫の性か娘が拾ひ来し猫は未だにわれに懐かず　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会

三月例会　　目黒十一　指導

朝の餉の蕗味噌香る月命日　邦男

初午や雪に埋もれし母の家　又壱歩

病院の妻を見舞えり春の雷　吉児

冬去れり天蚕の繭色褪せて　洋子

赤き靴左右違えて牡丹の芽　都

一芸は棒鱈煮染め曾孫来たる　隆堂

堀に沿い下萌見ゆる朝の雨　邦夫

山峡の道ひとすじや雪解風　郁子

沈丁のほのかな香り借り厠　笑羊

ひいなの日華やぐナース・ステーション　礼

犬の乳歯ころんと抜けて戻り寒　康女

買い求むケーキ持つてに春の雪　修一

冴返る息かけて捺す認印　一灯

雪深し二の足を踏む小用足し　リウコ

宅配の買物を待つ春日和　一穂

山肌の雪の亀裂や空の紺　敦子

側溝の流れ早めて冴返る

使わない部屋ほど隅の余寒かな

四十万の墓碑寒々と高野山

雪国に子を産み育て来しこの身

雛飾り夜はほほほと公家言葉

吹雪かれて曲がり曲がりゆく轍

白鳥の群対岸に只見川

新しきカレー料理や春の宵

水底に鮠のかたまる春の川

川濁り中州のみこむ春の雨

和太鼓の響き夜空へ冴返る

幻影の雪のお城に獅おどり

ひっそりと村の節分過ぎにけり

のぼり旗ひときわ目立つ雪祭り

除雪車に眠り覚まさる夜明けかな

燦々と春の陽射しや玻璃戸開け